

〔原 著〕

中学生の攻撃行動

— ストレスと社会的望ましさの観点から —

筑波大学心理学研究科：櫻井 良子

徳島大学総合科学部：佐野 勝徳

筑波大学心理学系：新井邦二郎

Aggressive behavior of junior high school students

— the view of stress and social desirability —

Yoshiko Sakurai, Katsunori Sano and Kunijiro Arai

問題と目的

攻撃性については、様々な分野において議論がなされているが、現時点で統一的な見解は得られていない（大淵，1993）。大淵・北村・織田・市原（1994）によると、攻撃性とは、一定の刺激（他の人々や出来事）に対して攻撃的に反応する傾向である。攻撃性は性格特性とみなされているが、確かに攻撃的に反応しやすい人とそうでない人がいる反面、どんなときにも穏やかで冷静な人がいる。ある一群（コホート）を対象に、長期にわたって心理学的測定を繰り返す追跡的発達研究がいくつか行われているが（Olweus, 1993）、それらの結果を見ると、攻撃性は変わりにくい特性の一つであることがわかる。つまり、攻撃性は人間の本性の一部であるといえる。

攻撃行動とは、他者に身体的・心理的に苦痛を与える行動、あるいは、それを願望する内的状態である。攻撃反応にはさまざまなタイプがあるが、人々が示す攻撃反応は特定のタイプに偏る傾向がある。たとえば、暴力など身体的攻撃反応は女性よりは男性に多く見られる。反対に、人を非難したり、皮肉を言ったりする言語的攻撃は女性に多いと言われる（Frodi, A., Macaulay, J. & Thome, 1997）。これら外部に表出された攻撃行動とは別に、内的な攻撃傾向も考えなければならない。怒りや不満といった情

動感情、あるいは、反抗心や猜疑心などの敵対的態度・信念である。外的反応と内的反応の間には通常は関連性があり、表出された攻撃行動の背後にはたいてい怒りや敵意などの内的反応が存在する。

本研究の第一の目的は、中学生の攻撃行動の背景にあるものとして、ストレスとの関係を検討することである。現代社会において、ストレスをもたらすストレスラーは無数に存在する。個人内に蓄積され、行き場を失った子どもたちのストレスが、健全な形で発散されるのではなく、いじめや暴力あるいは内にこもる行動へと形を変えて表面化していることが考えられる。

攻撃性とストレスの関連については、既に多くの知見が得られている。たとえば、攻撃性という性格特徴は、直接ストレスや対人行動の問題をもたらすだけではなく、長期的な影響としてうつ病などの心の疾患をもたらす可能性をもつ（Bluen, Barling, & Burns, 1990; Yamasaki, 1998）。攻撃性が様々なストレスをもたらすことは繰り返し報告されている（たとえば、Watkins, Ward, Southard, & Fisher, 1992）。また、精神面では、抑うつと敵意との正の関連が報告されている（Yamasaki, 1998）。神村・嶋田（1998）は、中学生の攻撃行動と学校ストレスとの関連の研究において、敵意性の高い生徒は抑うつ不安傾向が高いと同時に身体的攻撃が発現しやすい傾向があるという結果を得た。この

結果は、普段はおとなしそうにみえるタイプの生徒がキレる可能性を示唆しているという。そして、学校での「いじめ」問題なども子どもたちのもつ攻撃性が関わっていることは言うまでもない (Olweus, 1991)。

第二の目的は、いい子の特性を反映すると考えられる社会的望ましさに焦点をあて、攻撃行動との関係を検討することである。社会的望ましさが高い子どもは、攻撃行動は発現しにくいと考えるのが普通だが、一見して「普通」の「いい子」が攻撃行動を発現するときに、社会的望ましさの背後に抑えられた攻撃行動、特に内的な攻撃傾向が高いのではないかと考えられる。従って、社会的望ましさと攻撃行動には正の相関があることが予想される。

「普通の良い子が『キレ』やすい」こととストレスの関連で、宗像 (1998) は「成長する心理的環境が保護的すぎて、『周りが分かってくれないと腹が立つ』という心の依存心が強かったり、またまわりが管理的すぎたため『見捨てられるかも知れない』ことを恐れ、自分を信じることができないイイ子心を持続させる、そのことで怒り、恐れ、悲しさなど苦痛の伴った悪いストレス (ディストレス) を慢性化させる。さらにはこの悪いストレスしかもてない自分に対し自己嫌悪を持つことで苦しむことになる」と指摘している。また、佐川 (1998) は、問題行動の主体となる少年を2パターンに分類し、反社会的行動を繰り返す「活火山型」と突発的に重大事件を起こす「休火山型」としている。“キレ”る少年は後者の部類とされ、その心の中では、怒りや不満のマグマが煮えたぎっているが、我慢強く何事にも頑張っており周囲には“いい子”とされているが、いざ爆発すると周囲の警戒がないだけに十分な対応ができず、その衝撃も被害も予測できないほど大きいものとなるという。

本研究では「相手に対して何らかの危害を加えることを意図した行動」、つまり敵意的攻撃 (hostile aggression) という秦 (1990) の定義を攻撃行動として用いる。そして、攻撃行動の問題を、ストレス及び「いい子」の特性を映じるものとしての社会的望ましさとの関係から検

討することを目的とする。ストレスは、攻撃行動と正の相関があり、社会的望ましさは攻撃行動と正の相関があると予想される。

方 法

被調査者及び手続き

岡山県内の公立中学校3校の2～3年生904名を対象とし、平成10年11月下旬から12月上旬 (学期末テスト前) に、クラスごとの一斉法もしくは自宅での記入を求め翌日回収する無記名方式で実施した。記入もれや記入ミスのあったものを除き、有効回答者784名 (2年生男子185名、女子197名、3年生男子197名、女子205名: 有効回答率82%) を分析対象とした。

質問紙

(1) ストレス尺度

「心理的ストレス反応尺度 (Psychological Stress Response Scale: PSRS)」(新名・坂田・矢富・本間, 1990) を用いた。測定される内容は「抑うつ」「不安」「不機嫌」「怒り」の4つの情緒的反応、「自信喪失」「絶望」「無気力」「心配」「焦燥感」「不信」「引きこもり」「思考力低下」「非現実的願望」の9つの認知・行動的反応の合計13反応である。回答は53の質問項目の各々について、回答時の2, 3日中の感情や意識や行動の状態をよく表すように、「全くちがう (1点)」「いくらかそうだ (2点)」「まあそうだ (3点)」「その通りだ (4点)」の4段階で自己評定させた。

(2) 攻撃行動尺度

「敵意的攻撃インベントリー (Hostile Aggression Inventory: HAI)」(秦, 1990) を用いた。HAIは、攻撃性をもっとも問題とされる小学生から中学生までを対象に作られた尺度であり、計64項目から成る。「身体的暴力」「敵意」「いらだち」「言語的攻撃」「間接的攻撃」「攻撃の置き換え」「社会的望ましさ」の7つの下位項目から成る。回答は「そうだ (5点)」「少しそうだ (4点)」「どちらでもない (3点)」「少しちがう (2点)」「ちがう (1点)」の5段階で自己評定

させた。

(3) 社会的望ましき尺度

HAI の下位項目のひとつである「社会的望ましき」を用いた。本研究では、この社会的望ましきを「いい子」の反映として用いる。攻撃行動と同様に5段階で自己評定させた。得点が高いほど、社会的に望ましいことを示す。

社会的望ましきとは、本来 lie scale などとともに、本当に見たいある特性について、被験者がちゃんと答えているか、あるいは得点が被験者の本当の特質を反映したものになり得ているかをチェックするために用いられるものである。従って、攻撃行動とは負の相関があると仮定できる。しかし、こうした尺度そのものが「いい子」、すなわち他者の目に映じる自分を強く意識し、相対的にポジティブな自分を演じようとする傾向を間接的に示すものと考え、今回それ自体を分析対象とすることにした。

結果と考察

攻撃行動、ストレス、社会的望ましきの各尺

度における学年及び男女別の平均点と標準偏差を Table 1 に示す。

攻撃行動、ストレス、社会的望ましき各尺度間の関係について検討するために、Person の積率相関係数を算出した (Table 2)。その結果、攻撃行動とストレスの各下位尺度間で有意な正の相関が見られた。質問紙の構成上、各尺度が同一の内容を測定している可能性があるため、全体として高い相関が得られたことが考えられる。攻撃行動と社会的望ましきでは、敵意 (.38, $p < .01$) といらだち (.09, $p < .05$) の間に有意な正の相関が見られた。社会的望ましきは、表面に現れない内面的な攻撃行動と関連があることが示された。

ストレス反応得点の程度により攻撃行動に差があるか否かを調べるために、被験者をストレス反応得点により、平均値+0.67標準偏差以上の得点の者を高群、平均値-0.67標準偏差以下の得点の者を低群に群分けし、ストレス高群184名 (男子77名、女子107名)、ストレス低群236名 (男子144名、女子92名) を対象とし分析を行った。ストレス高低群の攻撃行動得点につい

Table 1 各尺度の平均と標準偏差

	2年		3年	
	男子	女子	男子	女子
攻撃行動				
身体的暴力	2.51 (.67)	2.35 (.61)	2.72 (.72)	2.44 (.64)
敵意	2.79 (.65)	3.09 (.58)	2.98 (.68)	3.14 (.59)
いらだち	2.48 (.77)	2.75 (.73)	2.68 (.80)	2.93 (.79)
言語的攻撃	2.50 (.67)	2.54 (.68)	2.64 (.68)	2.64 (.69)
間接的攻撃	2.61 (.70)	2.67 (.70)	2.74 (.72)	2.59 (.73)
置き換え	2.06 (.54)	2.65 (.48)	2.70 (.51)	2.67 (.46)
ストレス				
情動的反応	1.85 (.38)	1.87 (.31)	1.92 (.38)	2.04 (.42)
認知・行動的反応	1.74 (.37)	1.84 (.32)	1.84 (.38)	1.97 (.38)
社会的望ましき	2.67 (.54)	2.65 (.48)	2.67 (.51)	2.67 (.46)

カッコ内は標準偏差
注)合計点を項目数で割った得点を示してある。

Table 2 各尺度間の相関行列

	攻撃行動					
	身体的暴力	敵意	いらだち	言語的攻撃	間接的攻撃	置き換え
ストレス						
情動的反応	.36**	.22**	.47**	.31**	.33**	.18**
認知・行動的反応	.35**	.24**	.49**	.28**	.37**	.14**
社会的望ましき	.02	.38**	.09*	.05	.01	-.05

($p < .01$ *, $p < .05$ *)

て、 t 検定を行った結果、両群間に1%水準で有意な差が認められた ($t=5.944$, $df=418$, $p<.01$)。ストレスの高い子どもが、より高い攻撃行動を示すことが認められた。中学生の攻撃行動において、ストレスが重要な要因であることが示された。

社会的望ましき得点の程度により攻撃行動に差があるか否かを調べるために、被験者を社会的望ましき得点により、平均値+0.67標準偏差以上の得点の者を高群、平均値-0.67標準偏差以下の得点の者を低群に群分けし、社会的望ましき高群206名(男子85名、女子121名)、低群205名(男子115名、女子90名)を対象として分析を行った。社会的望ましき高低群における攻撃得点について、 t 検定を行った結果、1%水準で有意な差が認められた ($t=10.206$, $df=409$, $p<.01$)。この結果は、社会的望ましきの高い、つまり一般的にまじめとされている子どもに攻撃得点が高い傾向がある、とも捉えられる。逆にいえば、攻撃行動得点の高い子どもは、一般に社会的規範の理解が乏しい故にそうした行動に走るのではなく、むしろ知識のレベルにおいては十分理解しているといえる。しかし、その社会的に望ましいとされる知識の本当の意味での理解には至っておらず、周囲の大人に合わせた、単なる知識による理解のみで終わっている可能性がここに示唆されているのではなかろうか。

まとめと今後の課題

本研究では、中学生の攻撃行動について、ストレスと「いい子」の特性がどのように関係するか、調査・分析を試みた。そして、「いい子」特性を測るものとして社会的望ましき尺度に着目し、それ自体を分析対象とした。先行研究より、攻撃性が様々なストレスをもたらすことが報告されており、本研究においてもそれらの研究と同様の結果が得られたと考えられる。また、攻撃行動と社会的望ましきは負の相関が想定されていたが、攻撃行動の各下位尺度と社会的望ましきとの相関係数を算出した結果、置き換え

を除く全項目で有意ではないにしろ正の相関がみられ、敵意やいらだちといった内的な攻撃行動では有意な正の相関が認められた。また、社会的望ましき高低群における攻撃得点の差を比較した結果、有意な差が認められた。これらの結果から、社会的望ましきの高い子どもは攻撃行動を喚起しやすいが、その攻撃行動は表面に現れるものではなく、敵意やいらだちといった内的な攻撃行動が高いことが考えられる。そして、そのような攻撃的感情が表面化する過程で社会的望ましきが影響を与えている可能性が示唆された。

しかし、本研究で用いた尺度では、攻撃行動とストレスは互いに共通する因子を含んでいることが考えられ、社会的望ましきにおいても攻撃行動尺度である HAI の下位項目を用いたため、これらの尺度の信頼性と妥当性の問題が残されている。

引用文献

- Bluen, S. D., Barling, J., & Burns, W. 1990 Predicting sales performance, job satisfaction and depression by using the achievement strivings and impatience-irritability dimensions of Type A behavior. *Journal of Applied Psychology*, **75**, 212-216
- Frodi, A., Macaulay, J. & Thome, P. R. 1977 Are women always less aggressive than men?: a review of experimental literature. *Psychological Bulletin*, **84**, 634-660
- 秦一士 1999 敵意的攻撃インベントリーの作成 心理学研究 **64**, 4, 227-234
- 神村栄一・嶋田洋徳 1998 中学生の攻撃行動と学校ストレスとの関連—中学生用攻撃性質問紙 (HAQS) を用いて— 日本心理学会第62回大会発表論文集, 191
- 宗像常次 1998 ストレスで「キレ」るいい子の心の教育 「教育と医学」, **4**, 44-52
- 新名理恵・坂田成輝・矢富直美・本間昭 1990 心理的ストレス反応尺度の開発 心身医学, **30**, 1, 29-38

- 大淵憲一・北村俊則・織田信男・市原眞紀
1994 攻撃性の自己評定法：文献展望 季刊
精神科診断学, 5, 443-445
- 大淵憲一 1993 人を傷つける心 攻撃性の社
会心理学 サイエンス社
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 1992 中学生
用ストレス反応尺度作成の試み 早稲田大学
人間科学研究, 5, 1, 23-29
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・神村栄一・山野美樹・坂
野雄二 1992 心理的ストレスに関する調査
研究の最近の動向—教育現場におけるストレ
ッサーの研究を中心として— 早稲田大学人
間科学研究, 5, 1, 149-158
- Olweus, D. 1980 Familial and temperamental
determinants of aggressive behavior in ado-
lescent boys: a causal analysis. *Developmental
psychology*, 16, 644-666
- Olweus, D. 1991 Bully/ victim problems among
schoolchildren: Basic facts and effects of a
school-based intervention program. In D. J.
Pepler & K. Rubin (Eds.), *The Development
and treatment of childhood aggression* (pp. 411-
448)
- 佐川栄子 1998 キレル少年 活火山型と休火
山型 月刊少年育成, 5, 22-27
- Watkins, P. L., Ward, C. H., Southard, D. R., &
Fisher, E. B. 1992 The Type A belief system:
Relationships to hostility, social support, and
life stress. *Behavioral Medicine*, 18, 27-32
- Yamasaki, K. 1998 The effect of social support
on depression in Type A or hostile individuals.
*Research Bulletin of Educational Sciences (Naruto
University of Education)*, 13, 1-5
- 山崎勝之 1999 学校クラス集団における攻撃
性低減への総合的教育プログラム—プログラ
ム理念と攻撃性の発達・顕在化に関する基礎
研究— 鳴門教育大学研究紀要, 14, 29-41

を、加筆、修正したものです。卒業論文作成時
の統計的データ解析にあたり、徳島大学大学開
放実践センターの川野卓二先生に多くのアドバ
イスをいただきました。心から感謝いたします。

付 記

本研究は、櫻井が平成10年度に徳島大学総合
科学部に提出した卒業論文に関わる研究の一部